

審査の結果の要旨

氏名 石井 悠

本論は、小児疾患経験者やその母親、病棟保育士に対する面接調査から、子どもの自身の病気およびその治療や予後などに関わる様々な不確かさ、すなわちイルネス・アンサー・テンティ (Illness uncertainty; IU) の構成概念やそれが生涯発達に及ぼす影響、また IU の発生に関わる諸要因について仮説生成を試み、発達早期段階に重篤な病気を経験した子どもに対していかなる長期的・包括的な支援をなすべきか、その支援の確立に向けて理論的かつ実践的な示唆を得ることを企図したものである。論文は、全4部5章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、まず小児医療現場の実態およびそこに潜在する問題にふれ、病気を経験した子どものその後の発達に長期的影響を及ぼし得る要因として IU に刮目することの意義を論じた上で、子どもの IU 研究の課題として、青年期以前に一定期間 IU を経験することが子どもの生涯発達に影響を及ぼす過程や機序および支援に関わる視座が理論的に十分に整理されていないことを論じた。殊に、子どもの IU という構成概念が曖昧であり、また母親の IU から子どもの IU への影響機序、子どもを取り巻く重要な他者としての病棟保育士との関わりが子どもの IU に与える影響について未検討であるという点を指摘した。

第Ⅱ部第2章(研究1)では、小児慢性特定疾患治療研究事業の対象となっている疾患を青年期以前に経験し、現在、成人期前期にある6名とその母親6名に半構造化面接を実施し、「病気や治療の時間的な見通しに関するIU」と「病気の社会的な意味に関するIU」が、成人期前期における将来展望と相対的に強く関連する可能性を示した。そして、母親のIUが、母子間の日常のコミュニケーションを通じて、子どものIUに影響する機序に関して論考を行った。さらに第Ⅱ部第3章(研究2)では、研究1の結果に基づき、同一病院の小児がん経験者に対象を絞り、青年期後期にある経験者6名とその母親4名に対して半構造化面接を行い、その内容を「答えのあるIU」・「答えのないIU」という視点から吟味し、また「なんで私が(why me)」という不条理感を含めて検討する必要性を論じた。

第Ⅲ部第4章(研究3)では、まず調査1において病棟保育士16名への面接調査を行い、子どもの現在の心理状態のみならず、その後の発達に関して長期的視座をもって保育を行っている保育士が、自身と子どもとの関係性構築に向けた配慮・工夫や子どもの情緒の安定に向けた働きかけを始め、様々な効果的支援を行っている可能性を示した。また、それと同時に、一部の保育士が小児病棟における自身の役割の曖昧性およびそれに伴う苦悩や徒労感を抱えながら病棟保育を行っていることを明らかにした。調査2では、調査1において長期的視座をもって支援目標を語った3名の保育士を対象に改めて面接を行い、病棟保育士の子どもに対する働きかけや応答などのあり方が、子どもの入院生活の見通しに関するIUや病気や治療に関するIUの予防や解消に深く関与し得る可能性を審らかにした。

第Ⅳ部第5章の総合考察では、3つの研究結果の知見を改めて整理し、これからのIU研究の課題と展望を示すとともに、今後の小児医療現場が病気の治療のみならずそれ以外のところでも病児とどのように向き合うべきかということに関して実践的な考察を行った。

本論の学術的価値は、医療技術の進展により小児疾患経験者のいわゆるサバイバーが確実に増える中、家庭および病棟における病児へのケアが専ら医療的なものだけであってはならず、その子どもの生涯発達に向けた心理的なものでもある必要性を実証的に訴え得たという点にあり、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。